

論壇

英国、ドイツ、スペインで

欧州の政治状況が怪しくなってきた。EUからの離脱を国民投票で決めた英国では、離脱交渉が進まない中で政治的な混乱が続いている。EU離脱批判の書籍なども多く出版されているようだ。国民投票の勢いで離脱に進む決断をしたものの、いまになって離脱に反対する人が増えているという報道もある。それでも、もう後戻りするという選択肢は残されていない。

欧州統合を支えてきたドイツの

伊藤 元重 学習院大教授(国際経済学)

メルケル政権も難しい状況に追い込まれている。前回の選挙で議席を大きく減らし、連立政権が確立できない。ドイツの政治が不安定化しているのだ。2012年のギリシャ危機以来、欧州の安定を支えてきたのがドイツであるだけに、ドイツの政治の不安定化は欧

欧州の政治的な潮流の変化

州全体の不安定化につながりかねない。

これ以外でも、将来に不安を残す動きがあとこちで起きている。スペインではカタール・ニャ自治州が独立を求める住民投票を行った。これにはスペインの中央政府が厳しい対応で臨んだので、今

の段階では混乱は起きていないが、将来に影響が残りそうだ。オーストリアでは移民制限を主張する政党が政権についた。欧州内での人の移動の自由を掲げるEUの理念とは対立する考え方だ。他の多くの国でも、極右や反グローバル化の政党が議席を伸ばしてい

る。

戦後70年統合を進めてきた欧州の政治的な流れに、大きな潮流の変化が起きていることはまちがいない。問題はこのような動きが本格化するのか、それとも小さな混乱で終わるのかということだ。

新聞やテレビなどの報道を見てみると、どうしても悲観的な見方に振られてしまう。センセーショナルな動きを報道するのが新聞などの役割でもあるので仕方のない面もある。しかし、こうした政治的な混乱にもかかわらず、株価や為替レートが暴落しているわけではないことにも留意しておくべきではない。

「警戒しながらも楽観的」

戦後70年、欧州は統合に向けて成果を重ねてきた。ヒト・モノ・カネなどが欧州域内を自由に移動し、経済統合は着実に進んでいる。政治的な動きがあったとしても、こうした現実の経済社会の構造が一夜にして崩れるというものではない。

当面は、政治的な混乱と安定した経済の間で綱引き状態がつづくと考えざるべきだろう。政治的な潮流は無視できない影響を経済や社会にもたらすので、楽観視はできない。欧州に進出している多くの日本企業もこうした動きを注視しているはずだ。ただ、欧州は統合をやめたと決めたわけではない。統合に疑問をもった政治勢力が問題提起を行っている状況だ。英語で「cautiously optimistic」（警戒しながらも楽観的）という表現があるが、今の欧州についてはこうした見方がよいのではないかと考えている。

*この記事は静岡新聞社編集局調査部の許諾を得て転載しています。無断転載、複製を禁じます。